
星になれればいいのに

鈴木崇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星になればいいのに

【Nコード】

N0500G

【作者名】

鈴木崇

【あらすじ】

帰宅途中にウンコがしたくなるという、誰もが経験したことのある孤独で悲痛な戦いを克明に描いた渾身のノンフィクション。

夜空を見つめながら思った。

「このまま星になればいいのに」

（これは、2004年9月1日深夜に起きた悲劇の物語である）

駅の階段を上る途中、お腹に違和感を感じた。

とはいえ、大江戸線特有の深い階段を引き返して、再度改札をくぐり駅構内のトイレを借りる程の事態ではないと思った。

何より、あと5分もすれば、家のトイレで漫画を読みながら至福の時間を満喫できるはずなのだ。

好きな漫画を読みながら溜まりに溜まった糞を排出する…。

人の一生の中でも数少ない、幸福感を体いっぱい感じる瞬間である。

そんな至福の瞬間をイメージしてしまった以上、もはや選択というまでもない当然の行動であった。

駅を出て、家に向かう。

地上に出てから50メートル程進んだ時だろうか、ふと嫌な予感がした。

「奴かもしれない」

歩くスピードをアップする。すぐに予感確信に変わる。

「奴だ！」

腹痛と脱糞の因果関係において第一にあげられるもの、それは糞

の硬度である。

一般的に恐れられている、下痢時特有の水状のものは、精神的な苦痛とは裏腹に、実は、尻穴をこじ開けるだけの力は無。気持ちに折れない限り、これらが放出されることはないと言言できる。

反対に、カチカチに固まったものが出る時は、えてして体調が優れており精神的にも強気であるため、ガチンコの力勝負を経て、何とか助かることができる。

しかしながら、それらの中間かやや軟らかめに位置する、肉体的にも精神的にも一見それ程の威圧感を感じず、それでいてふとした瞬間に一気に凶暴化する性質を持つもの、それこそが“奴”である。

相手が奴であることを悟り、いつきに緊張感が走る。

選択肢は3つ。

家に急ぐ。

駅に引き返す。

家とは別の方向にある公園に行く。

今思えば、地理的に最も遠い選択肢だったようにも感じられる。

しかし、何故なのかその時は断然そうすべきだと思った。

無意識に暗い方へ行こうという、最悪の事態に備えた防衛本能が働いたのかもしれない。

2〜3分後、私は公園内にいた。

夜の11時過ぎということもあり、ほとんど灯りはない。

刹那、奴がその恐ろしい本性をあらわす。予想通りだ。

こういう局面ではまさに経験こそがものをいう。

完全に歩を止めて奴との格闘に専念する。

ここが勝負どころだ。勝負師の勘がそうつぶやく。

不意に前方から若い女性が歩いてくるのが見えた。
暗闇で見ても自分の体勢は明らかに不自然な気がした。

まだ人としての尊厳を守ろうとする余裕があったのだろう。
とっさに歩を再開する。

少しもれる。

まだ大丈夫。今日は厚手のブリーフだ。

数分前からすれば悪夢のような状態ではあるが、不思議なもので人はこのような時、「あそこでトイレに行っていれば…」という類いの後悔の念は一切生まれない。

過去を振り返るような余裕も無いのだろう。

未来のダメージを最小限に食い止めることだけに全神経が集中した、恐ろしく前向きな精神状態になれるのである。

前方にトイレが見える。あと20メートル。

事前にベルトを外し、両手でズボンを吊るしながら目標を目指す。
事前準備の差が明暗を分けるケースは、意外にも多い。

トイレ内に入る。

個室のドアが閉まっている。同時に赤いマークが目に入る。
少しもれる。

あらゆる可能性を想定しているため、さほど動揺はない。

まさに経験の賜物というべきものであろう。

すぐさま、きびすを返して女子トイレに向かった。

その足取りはまるで生まれたての小鹿のようでもある。

個室は2つあり、両方とも開放中である。

何故か無意識にあえて遠いほうに入ると、内側から鍵をした。
ついに、逃げ切った…。

瞬間、心に一瞬の隙が生まれたのかどうかは定かではない。ただ、分かったことは、時すでに遅かったということだ。一度動き出した流れはどうすることもできなかった。自然の流れの前に、人はあまりに無力である。

ある種の安堵感ともとれる不思議な感覚に襲われる。

それは、肉体的苦痛から解放されたことによるものなのか、少なくとも人前での脱糞は回避できたという小さな成功に対する達成感からなのか、はつきりとした理由は分からない。

ただ、全ての流れがストップするまでの数秒間に関する限りは、悲壮感や絶望感といったものとは全く無縁の、恍惚ともいべき時間が流れたことだけは確かなのである。

まるで夢の中にいるようだ。

いや、そもそもこれは本当に夢なのではないだろうか。

しかし、そのまどろみの時間が過ぎてしまうと、厳しい現実がいっきに顕在化する。

左の太ももが温かい。

奴は分岐点で左を選んだようだ。

やがて、左足のかかとの裾から大量の糞が垂れる。

とっさに便器上空に足を持ってきてしまったのは、せめて公共のトイレだけでも綺麗に保とうというぎりぎりのモラル意識からなのだろうか。

夢などではなかった。

もはや疑う余地も無いほど見事なまでに脱糞していたのである。

このとき、私はスーツを着用していた。

これは脱糞時のコスチュームとしては最悪のようでありながら、

実のところ真に幸運であつた。

変色前の色がもと、ズボン黒、靴は茶色であつたからだ。
しかも、時間は深夜だ。

条件は整っていた。

さらに、もう一つ奇跡的に幸運だったことは、女子トイレの個室であつたことである。

女子トイレの個室は、男子トイレのそれが1つしかないのに対して2室ある。

数字にすればたった1つの違いであるが、この差は決定的ですらある。

これにより、仮に何時間滞在しようと、次の人がノックをすることも周りに不審がられることもない。

まさに、災い転じて福となす。

終電の時間を考えれば、12時過ぎになれば人通りが無くなるだろう。

個室の中で、色々なことに思いを馳せながら時間を潰した。

豊富すぎる時間は、半ば強制的に人を哲学者にさせる。

なぜ人は生きているのだろうか。

そんなことを考えながらふと見上げると、ドアの上の隙間から星が見えた。

星空を見ることなど、いつ以来だろうか。

途中、悪臭のあまり意識が飛びそうになるのを、尻周りの尋常でない痛痒さがそれを阻止する。

この世で考えられる限り、最も因果な均衡の取れ方だ。

この個室の中で過ごした1時間は、私の人生の中で最も長い1時間となった。

夜空を見つめながら思った。

「このまま星になればいいのに」

・ ・ ・

この後のことはよく覚えていない。

むしろ家に着いてからのほうが壮絶な光景であった気もするし、
淡々と事後処理を終えただけのような気もする。

ただ確かなのは、無事に家に辿り着き、綺麗な体で清潔な布団に入る
ことができたということだ。

物語は終わり、いつもの平穏な日常を取り戻した：かのように見えた。

しかしながら、この物語にはまだエピローグが残っていた。
まるで脚本家があらかじめ用意していたかのように。

・ ・ ・

長い戦いを終えた体には休息が必要であったのだろう。

何時間寝たのかは分からないが、起きた時に満足感のある睡眠が
とれた。

実にすがすがしい。

前夜の悪夢のことなどすっかり忘れていた。

さて、一体何時なのだろうか。

感覚的には、朝か昼か夕方かの確率が均等であるように思えた。時間を確認するため、いつものように携帯を探す。

充電器に手を伸ばしてみるが見付からない。

家の電話から携帯を鳴らす。これも日常的に使う手段だ。

だが、ここからがいつもとは違った。

携帯の着信音もバイブ音も聞こえない。

普段であれば、さほど不思議なことでは無かったかもしれない。ただ、この時は、何故かとっさに鳴らすのを止めた。

「やばい！」

ゴミ置場の透明なゴミ袋内で、糞まみれのスーツのズボンが、ピリピリと着信音を鳴り響かせながらバイブしている、世にも不気味な光景が頭に浮かんだ気がした。

さらに、もっと早い時間に誰かが何度も携帯を鳴らしていた場合を考えると、親切な住民か清掃員がゴミ袋を開けて携帯を保管している可能性も考えた。

糞まみれのズボンの持ち主が現れるのを待ちながら……。

携帯はあきらめよう。

一瞬そう考えたが、あの携帯には様々な個人データが入っているし、何より、誰かが保管していた場合、携帯が鳴れば親切にも「この携帯電話の持主をご存知ですか？」と電話に出してしまう可能性がある。ある。

さすがに、「糞まみれのズボンと一緒にだったんですけどね（笑）」と言ってしまおうような人間はいないと思うが、そもそも悪臭漂うゴミ袋から携帯を取り出してしまう神経の持主であれば、あながちあ

り得ないとも言いきれない気がした。

すぐに外に飛び出た。

「置いた場所に残っていてくれ」

ただそれだけをひたすら祈っていた。

糞まみれのズボンの存在を祈る者など、人類史上いたのだろうか。

万が一、人だかりが出来ていることを想定し、努めて冷静を装って現場に近づく。

誰もいない。

幸運なことに、置いた場所にはゴミがたくさんあり、収集日では無かったようだ。

大量のゴミ袋の中から宝探しのようにただ一つのゴミ袋を求めた。宝などではなく糞のついたズボンが入っているのだが…。

そして、ついに見覚えのある黒い物体の入った袋を発見することができた。

それをまるで泥棒のように家に持ち帰り、すぐさま中を開いた。

思いのほか臭くは無かった。

決して無臭と言えるような代物ではないが、焼きたてのパンのような香ばしい匂いだった。

そして、肝心のズボンは、まるで岩のようにカチカチに固まっていた。

「あった！」

ポケットに手を入れると、すぐに携帯が見付かった。

変わり果てた姿となったズボンの中で数少ない安全地帯に身を潜めていた携帯は、奇跡的に濁流の被害を受けることなく生き延びていたのである。

恐る恐る、匂いをかいでみる。

臭くない！

臭くないぞ！

私は、一両日中に起きた出来事をノスタルジックに振り返りながら、いつまでもいつまでも携帯電話の匂いをかいでいた。

　　＼星になればいいのに（完）＼

Copyright (C) 2004 Takashi Suzuki
All Rights Reserved.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0500g/>

星になればいいのに

2010年10月10日08時05分発行